

# 日隆聖人の備中本隆寺への弘通

— 地理的見地からの一考察 —

合 田 憲 隆

はじめに

日隆聖人は長い教学研鑽の時期を経て大部の著述を残されると共に、各地に教線を広げられ、法華宗再興弘通の唱導師と尊称せられるのである。

晩年は特に、京都本能寺、尼崎本興寺を二大拠点として、敦賀、河内、堺、兵庫、牛窓、備中高松、宇多津など西国に布教され、各地に寺院と弟子、信者などを獲得されていったのである。

この西国布教をみたとき、備中高松以外の地は室町時代の交通の要衝であり、人々の集まる場所であったことがわかる。では、日隆聖人は何故、交通の要衝ではなかったこの備中高松の地に巡られ、この地で足を止められたのか。また、どのようにしてこの地に至られたかについて検討してみたいと思う。

## 第一章、日隆聖人の西国布教

日隆聖人は、応永二十五年（一四一八）妙本寺退出後、河内三井村に難を避けられる。その後、応永二十七年（一四二〇）には尼崎に本興寺の礎を築き、応永三十三年（一四二六）越中国に向かい、色ヶ浜における祈祷により禅宗金泉義乗

を改宗させ、さらに敦賀では真言宗大正寺円海を帰伏させて本勝寺とされた。永享元年（一四二九）には京に本応寺を再建し、永享十一年（一四三九）には、河内に布教して加納の法華寺を得ている。宝徳元年（一四四九）には、西国布教を志され、牛窓本蓮寺を改宗させ、備中高松では江本蓮光を教化して本隆寺を建立し、讃岐に渡られ宇多津本妙寺建立の基を開かれる。兵庫の久遠寺を末寺とし、さらに宝徳三年（一四五二）には堺に顕本寺を建立されている。<sup>(1)</sup>

## 第二章、本隆寺への弘通

日隆聖人が西国布教された宝徳年間についての様々な伝記書があるが、その中から備中本隆寺に関する記事をいくつか次に取り上げてみる。<sup>(2)</sup>

1、『隆師尊縁記』：…岡宮光長寺二十四世日寛上人、元禄十五年十二月吉日

西国弘法周諸州一就中讃州本妙寺備中本隆寺有由緒一追而可尋レ之

2、『京都本能寺開祖日隆大聖人略縁起』：…日憲上人力  
尼崎本興寺

是より西国<sup>二</sup>趣せたまふてまづ備中の国新庄村にいたりたもふ 村中の酋長川上道蓮江本蓮光といふ 七月に  
せつたい供養をおこのふ 大上人此供養のかりや<sup>二</sup>入らせたもふて右の酋長のもと清談の時をうつしたもふ  
終<sup>二</sup>酋長大上人をとものふて我家に帰り本門の深秘をとききかせたもふ所<sup>二</sup>信伏随喜して蓮光道蓮力をあはせ  
飯に堂をいとなみ村中の老若をあつめ聞法結縁をせしめさせたまへ、一村こそつて受戒して則一院を創々する

是本隆寺と号（略）是より讚州卯辰の浜つかせたもふて

3、『日隆大上人略縁起』……本興寺五十八世日心上人

從<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>趣<sub>キ</sub>西国<sub>ニ</sub>初<sub>ニ</sub>至<sub>リ</sub>備中国新庄村<sub>ニ</sub>七月ノ比<sub>ナレハ</sub>有<sub>二</sub>接待供養<sub>一</sub>者<sub>一</sub> 師入<sub>リ</sub>此供養 假家<sub>一</sub>川上道蓮江本蓮光云兩人道 清談移<sub>レ</sub>時終伴還<sub>ニ</sub>居家<sub>一</sub>聞<sub>二</sub>當宗法義<sub>一</sub> 信伏隨從 兩人合力<sub>レ</sub>假<sub>ニ</sub> 當<sub>ニ</sub>草堂<sub>一</sub>集<sub>メ</sub>村中老若<sub>一</sub>令<sub>二</sub>開法結縁<sub>一</sub> 一村拳<sub>テ</sub>受戒<sub>ス</sub>終<sub>ニ</sub>建<sub>一</sub>立<sub>シテ</sub>精舍<sub>ヲ</sub>号<sub>ス</sub>本隆寺<sub>ト</sub>坊舍四軒並成<sub>ス</sub>師自<sub>ラ</sub>留<sub>テ</sub>遺書<sub>ヲ</sub>去<sub>レリ</sub> 學師來住<sub>セリ</sub>

4、『日隆大聖人御一代德行講演抄』……両山六十四世日芳上人

師弘經涉<sub>レ</sub>日<sub>ヲ</sub>逾<sub>レ</sub>月<sub>ヲ</sub>去<sub>テ</sub>備中国高松新庄村<sub>ニ</sub>到<sub>リ</sub>下<sub>テ</sub>折節盂蘭盆前後ノ事ナレハ有<sub>二</sub>接待供養<sub>一</sub> 師入<sub>リ</sub>供養ノ假屋<sub>ニ</sub>乞<sub>レ</sub>茶<sub>ヲ</sub>干<sub>レ</sub>時川上道蓮江本蓮光<sub>ニ</sub>云<sub>二</sub>兩人有<sub>レ</sub>傍<sub>ニ</sub>問<sub>云</sub>御僧<sub>ハ</sub>何国將<sub>ハ</sub>タ<sub>御宗躰<sub>ハ</sub>如何<sub>シ</sub>ト</sub> 問<sub>二</sub>師答云<sub>吾<sub>レ</sub>ハ</sub>摂州尼崎本山<sub>一</sub> 本興寺住僧宗旨<sub>ハ</sub>本門法華宗即宗門弘通<sub>ノ</sub>為<sub>レ</sub>諸国經廻<sub>ス</sub>ト云<sub>ニ</sub> 暫時御物語<sub>アル</sub>内早<sub>ヤ</sub>日<sub>モ</sub>夕陽<sub>ニ</sub>傾<sub>キ</sub>ケレハ翁<sub>云</sub>先<sub>今</sub>宵<sub>ハ</sub> 御僧我等<sub>カ</sub>宅<sub>ニ</sub>御逗留<sub>アル</sub>ト両翁師<sub>ト</sub>俱<sub>ニ</sub>宿所<sub>ニ</sub>歸<sub>ル</sub>家内イツレモ念頭ノモテナシ也 師茲<sub>ソ</sub>至<sub>ニ</sub>極良縁也<sub>ト</sub>思召<sub>シテ</sub>切角経王ノ深理<sub>ヲ</sub>述<sub>ハ</sub>本門宗義<sub>ヲ</sub>語<sub>リ</sub>下<sub>テ</sub>宿善目出度聞<sub>テ</sub>忽<sub>ニ</sub>信伏<sub>セリ</sub> 則<sub>二</sub>兩人合力<sub>一</sub>假<sub>ニ</sub>營<sub>ニ</sub>草堂<sub>一</sub>集<sub>メ</sub>村中ノ老少<sub>ヲ</sub>聞法結縁セシムル<sub>ニ</sub>村拳<sub>テ</sub>受戒得法<sub>セリ</sub> 則<sub>改</sub>号<sub>ニ</sub>本隆寺<sub>ト</sub>（略）化縁既<sub>ニ</sub>備<sub>ハ</sub>レリ故<sub>ニ</sub>師告<sub>レ</sub>別<sub>レ</sub>翁等泣<sub>テ</sub>而留<sub>レ</sub>之<sub>一</sub> 師慰諭<sub>シテ</sub> 辞<sub>シ</sub>次<sub>テ</sub>跨<sub>ニ</sub>蒼海<sub>ヲ</sub>

5、『本門法華宗<sub>本興</sub>本能<sub>二</sub>両寺<sub>一</sub>歴譜』……本興寺五十八世日心上人

初<sub>ニ</sub>至<sub>リ</sub>備中国新庄村<sub>ニ</sub>七月ノ比<sub>ナレハ</sub>有<sub>二</sub>接待供養<sub>一</sub>者<sub>一</sub> 師入<sub>リ</sub>此<sub>ノ</sub>供養ノ假屋<sub>ニ</sub>川上道蓮<sub>ト</sub>江本蓮光<sub>ト</sub>云<sub>二</sub>兩人道<sub>ト</sub>清談<sub>一</sub> 日隆聖人の備中本隆寺への弘通 — 地理的見地からの一考察 —

日隆聖人の備中本隆寺への弘通 ー地理的見地からの一考察ー

移<sup>レ</sup>時終<sup>ニ</sup>伴<sup>テ</sup>還<sup>ニ</sup>居家<sup>ニ</sup>(略)終<sup>ニ</sup>建<sup>ニ</sup>立<sup>シテ</sup>精舎<sup>一</sup>号<sup>ニ</sup>本隆寺<sup>一</sup>

6、『両山歴譜』…本能寺五十七世日唱上人

備中州有<sup>ニ</sup>帝釈山<sup>一</sup>依<sup>ニ</sup>師教<sup>一</sup>僧俗授戒立<sup>ニ</sup>一字<sup>一</sup>号<sup>ニ</sup>本隆寺<sup>一</sup>差<sup>ニ</sup>日学上人<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>第二祖<sup>一</sup>

これらにあるように、西国布教に向かわれた日隆聖人がまず着かれた所が、備中高松新庄村であったということである。時節はお盆の頃であり、通行人に接待供養をしており、日隆聖人も茶の供養を受けられた。そのとき村の酋長であるという川上道蓮、江本蓮光の二人が日隆聖人の法話を聞いて信伏し、一村改宗し、草堂を建てた。その後、本隆寺の寺号を与えられたという。続いて讃州宇多津に向かわれ、本妙寺を建立されるのである。

### 第一節、現在の本隆寺

現在、備中本隆寺は岡山市中心部より西北西へ約10kmの岡山市新庄上にある。吉備路と呼ばれるこの地域は古代吉備の国の中心であり、周辺には様々な史跡・旧跡が見られる。

まず東方向には、吉備津神社（岡山市吉備津）、吉備津彦神社（岡山市一宮）がある。それに関連して吉備津彦命と温羅との対決の伝承が残っている鯉喰神社（倉敷市矢部）、矢喰宮（岡山市高塚）などがある。北西方向には朝鮮半島の技術が多く投じられたといわれる古代の山城、鬼の城（総社市）も見られる。本隆寺の南を走る旧山陽道の傍

らには、備中国分寺、国分尼寺（総社市上林）もあつた。造山古墳（岡山市新庄下）、作山古墳（総社市三須）は全国でも第四位、九位の大きさを誇る畿内以外では最大の規模のものであり、数多くの副葬品で注目された王墓山古墳（倉敷市庄新町）など様々な古墳はこの地域の首長達の勢力を感じさせるものである。また、戦国時代においてこの地は、中国地方、ひいては中央と地方との折衝地であり、時代の大きな転換となつた羽柴秀吉による高松城の水攻めで有名な高松城趾（岡山市高松）も存在する。このように、備中本降寺は現在、歴史風土豊かな地域に立地している。

では、日隆聖人はどのようにしてこの備中高松にたどり着かれたのか、陸路と海路の二面から見えていくことにする。

## 第二節、陸路

### 第一項、山陽道

#### ①古代の山陽道

まず、日隆聖人が備中に至られる道筋として、山陽道が考えられる。山陽道は、古代には都京と筑紫太宰府を結ぶ官道として、国家にとつて最も重要な道であり、太宰府道・筑紫大道とも呼ばれた。「延喜式」兵部省では、唯一の大路とされ、大陸との交流の玄関口である太宰府と中央とを結ぶ山陽道は、特に重視されていたようである。県内の駅家としては、「備前国駅馬、坂長、珂磨、高月各二十疋、津高十四疋、備中国駅馬、津峴、河辺、小田、後月各二十疋」とあり、古代の駅家の整備は、大化改新の頃から行われたようである。<sup>63</sup>

この駅の配置からみると、播磨国から船坂峠を越えて備前国に入った山陽道は坂長駅に着き、そこから金剛川沿いに西に進み、和気渡しで吉井川を渡つて珂磨（河真）駅に至る。ついで日古木峠（旧山陽町）・下市（同）を経て高月駅に着き、旭川を牟佐（岡山市）付近で渡つて津高駅に至る。その津高駅から西に進み、備中国に入ると津峴駅に至

り、国分尼寺・国分寺の南を通り、高梁川を渡って河辺駅に至る。

## ② 津峴駅

県内の山陽道の駅家について、坂長駅（備前市三石）、珂磨駅（旧熊山町）、高月駅（旧山陽町馬屋）、津高駅（岡山市辛川市場）、河辺駅（真備町川辺）、小田駅（旧矢掛町小田）、後月駅（井原市七日市か高屋）と、だいたいの所在場所が推定されている。しかし、本隆寺に最も近い、備中の津峴駅については、いまだ定説がないのである。

それは、津峴駅が倉敷市矢部にもとめるものと、都窪郡山手村（現総社市）にもとめるものとの二つに分類できる。十世紀半頃に成立した「和名抄」には、備中都宇郡に駅家郷の郷名が見える。山手村は当時備中窪屋郡に属していたので、津峴駅家は窪屋郡の山手村内にあったとは考えられず、備中津峴駅は倉敷市矢部あたりに所在したと思われるのである。なお、「峴」の字は丘の頂上の平地を意味し、津峴駅家は都宇郡の津（港）、つまり吉備津が見える丘上の駅家ということになり、確かに現在の倉敷市矢部にあたると考えられる。

## ③ 中世の山陽道の道筋と宿場

鎌倉時代後期になると、山陽道の道筋は変わってくるようであり、正安元年（一二九九）成立の『一遍聖絵』にそれがうかがえる。これには、弘安元年（一二七八）に安芸（広島県）から山陽道を東上した一遍が布教のために訪れた「福岡市」の様子が詳しく描かれている。<sup>(4)</sup> それによると、「福岡市」には布・米・魚・鳥・壺（備前焼）等売る市座が立ち並び、多くの人々が集まって売買が行われており、その繁栄の様子をうかがうことができる。また、鎌倉時代の福岡には一文字派と呼ばれた刀鍛冶もあり、多くの名刀を鍛えている。福岡と吉井川を隔てた長船にも鎌倉時

代から戦国時代にかけての長船派と呼ぶ刀鍛冶がおり、福岡・長船は日本最大の鍛冶地であった。港町としての片上、備前焼の産地としての伊部、市場や鍛冶地としての福岡・長船の発展により、山陽道の道筋が鎌倉時代になって南廻りに変わって行くのである。弘安元年に福岡を訪れた一遍はその前に藤井でも布教にあたっており、山陽道は少なくともそのころまでには片上・福岡・藤井を通る南廻りの道筋に変わっていたようである。これらは南廻りに変わった山陽道に新たに開かれた宿場であった。

一方、備中における山陽道の道筋は古代とほとんど変わらなかったようである。辛川宿を経て備中に入った山陽道は板倉（岡山市）から矢部を経て軽部（清音村）に至り、高梁川を渡って川辺（真備町）・矢掛を経て備後へ向かっていた。部分的には変更もあったと思われるが、この道筋は近世に引き継がれている。古代の山陽道では備中に津峴・川辺・小田・後月の四駅が置かれていたが、中世には軽部・矢掛が山陽道の宿場として栄えた。

その後、南北朝末期の応安四年（一三七二）に九州探題として筑紫へ赴いた今川貞世が著した紀行文『道ゆきぐり』には、山陽道と宿場について次のように記している。<sup>55)</sup>

其日はふく岡につきぬ、家ども軒をならべて民のかまどにぎはひつゝ、まことに名にしおひたり（略）から川とかやいふところにとゞまりて、つとめてはきびつ宮の御まへよりすぐる、みちのほとりちかき鳥居のもとにくちなし色の衣きたる神づかさども立なみつゝ、たびのぬさたてまつるなるべし、きびの中山とは備中と此備前との二の社の中なればなるべし、谷川はをとにきゝしより猶心ぼそげなり、うちつゞきたるいがきのさまは、げにぞかうがうしきや、この御社どもに上矢一づゝたてまつりぬ、さてかるへ川・せいやまなどうちこえて、屋陰といふさとにとゞまり待ぬ

その日福岡に泊まった貞世は、京都でも福岡の繁栄ぶりを聞いていたらしく、「家ども軒をならべて」とあるように、そのころの福岡は繁華な町並みを形成していたようである。翌日、旭川を御野の渡しで越えた貞世は辛川宿に泊り、次の日には吉備津宮に参詣したのち、軽部川・妹山（真備町）を越えて矢掛に泊まっている。

次に時代は下るが、山陽道を専ら徒歩で、西から東へ旅した庶民の道中記の一節を紹介してみる。美濃国大野村（現岐阜県）の商人菱屋平七が、享和二年（一八〇二）に長崎からの帰路、この地方を通過したときの『筑紫紀行』の一節に、

六月五日、（略）かくて川をわたれば中島村、人家二十軒計茶屋あり。（略）半里 計行けば宿町、人家四、五十軒茶屋あり。又半里行けばせんそく村、人家三、四十軒茶屋あり

とある。<sup>6)</sup> この中で「せんそく村」とは千足のことである。現在は造山古墳の陪塚の千足古墳がある所であり、本隆寺からは南に約1kmのところである。

#### ④大覚大僧正の備中布教

大覚大僧正が備前・備中に布教にされたのは、暦応年間（一三三八〜四二）から康永年間（一三四二〜四五）にかけてのことであったとされる。備前では御野郡浜野（現岡山市）の豪族多田氏や同郡伊福郷（同）の地頭松田氏の依を得て松寿寺（岡山市浜野）や蓮昌寺（岡山市田町）を創建した。備中に入り賀陽郡野山荘（現吉備中央町・旧賀陽町）の地頭伊達氏の帰依を得て妙本寺を創建し、同寺を拠点に備前や備中を始め西国の布教にあたった。その他、真備町箭田の法華寺、清音村軽部の大覚寺等、数多くの寺院を建立されている。軽部の大覚寺には「大覚大僧正題目石」がある。この題目石は慶応五年（一三四二）五月に軽部宿で布教にあたっていた大覚大僧正が造立したものと伝えられている。また、辛川宿の跡に近い岡山市西辛川にも大覚大僧正造立と伝える題目石二基があった。

これらは、建武三年（一三三六）に起こった福山合戦の戦死者を供養するため大覚大僧正が造立したと伝えられている。大覚大僧正は、軽部宿や辛川宿にも逗留して題目石の造立を行うとともに布教されている。軽部宿や辛川宿はすでに都市的集落を形成していたものと思われるが、こうした宿場は多くの人々が集まり、政治的な規制や他宗派の抵抗も少なく、格好の布教の場であったのである。このように、大覚大僧正の備中布教は山陽道沿いにその跡が見られる。現在、備中高松の辺りにも題目石や、大覚碑などが多く見られる。これらは江戸時代に建てられたものであるが、法華信仰の広がりをはかるものである。

京都の妙顕寺に住した日像聖人は、野山の妙本寺の大覚大僧正に、金銭や物資の援助を訴え、また、援助があると礼状を出されているが、そのような書状が京都の妙顕寺には残されている。備中布教の拠点となった野山の妙本寺、軽部の大覚寺や真備の法華寺などと山陽道との位置関係をみると、備中高松の地域を徒歩で通られていたと考えられる。

## 第二項、松山往来

一方、本隆寺より一・五km東には、山陽道の板倉宿から松山城下（高梁市）に通じる松山往来が通じている。松山は備中北部の中心地であり、山陽・山陰連絡の要地であった。したがって、松山藩主の参勤交代の通路として、また、大山牛馬市場や松山城下南町の牛市場へ往復する牛馬や博労達の通路として主要な道路であった。松山往来というのは江戸時代の呼称で、中世にどう呼ばれていたのかは明らかでない。

その旧道と、今の国道一八〇号を対比しながら、板倉を出発し東から西へ、さらに北西へたどってみると、まず、

板倉からしばらく国道一八〇号に重なって西北上するが、立田から、同道の南を並行する。山陽自動車道をくぐり、原古才の集落を進み、高松の町中へ入る。ここには江戸時代花房氏の知行所があった。花房氏は熱心な法華信者であったことが知られており、この花房氏の陣屋の西門が明治初年に本隆寺の山門として移建されている。そのまま旧道を進み、三手を経て門前に至り、国道一八〇号線に再び重なる。ここで足守往来を北に分岐させて西へ向かって進むと足守川に出る。川を渡つたすぐ右手の矢喰神社を見ながら過ぎると、血吸川・砂川・長良川などが一カ所に集まっている。この辺りは平成三年（一九九一）に山陽自動車道が開通し、大きく様変わりしており、当時の様子を知るよすがもない。総社市に入ると、この辺りから旧道とほぼ同じところを通り、総社市街地に向けて西に延びている。

### 第三節、海路

前節では陸路による備中交通を見てきたが、当節では海路、瀬戸内海航路について見ていきたいと思う。

律令制成立以前はもとより、律令制下においても九州と畿内とを結ぶルートは瀬戸内海の海上交通が中心であった。それが見えるのは、七五六（天平勝宝八）年一〇月に「山陽・南海の諸国の舂米は、今より以後、海路を取りて遭送せよ」との政策が出されたことからわかる。<sup>6)</sup>その後、瀬戸内海は地方と中央を結ぶ重要な水路として利用されていくのである。

日隆聖人の西国布教を見てみても、尼崎、敦賀、堺、兵庫、牛窓、宇多津と布教の拠点とされたところが、港など交通の要衝であり、特に敦賀以外は室町時代の瀬戸内海の交通路に当たる港である。従って、日隆聖人の西国布教には舟が用いられたと考えるのが妥当ではないか。そうであれば、現在、児島湾の足守川河口から十八km程上流にある

新庄の地に日隆聖人はどのようにして至られたのか。また、どうして新庄の地に足を止められ、本隆寺建立の礎を築かれたのか。その頃の岡山、特に備中はどういう状況であったか、古代に遡り、まず地形的変化から見ていくことにする。

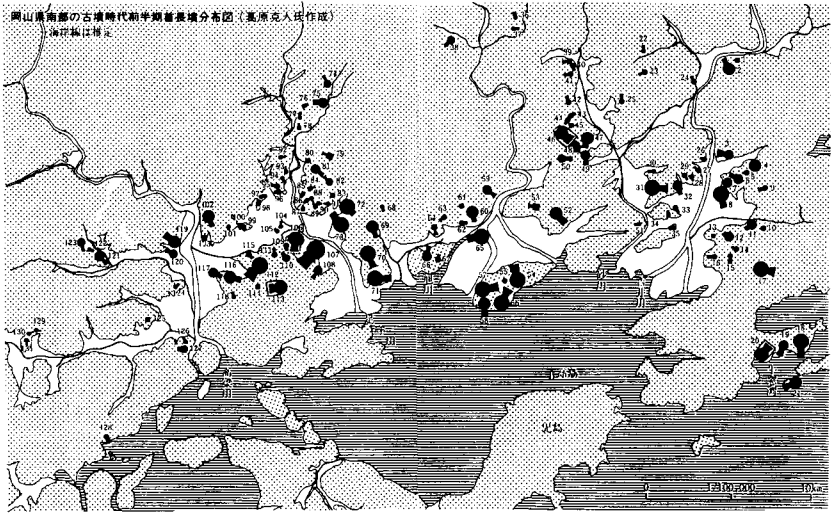
## 第一項、吉備の穴海

### ①吉備の穴海

「穴海」とは、島で囲まれた沿岸部が袋穴のように入り込んだ海峡をいい、内海という表現もされる。江戸時代に松本亮が著した『東備郡村誌』には、「内海。今児島より内、御野・上道二郡の前にある内也。古は此海甚広大にて、児島郡藤戸の地より備中西海に達せしときは、船舶往来の海なり。」「内海。穴海とは、今の内海の古名也。内海とは児島郡小串より内、御野・上道と児島の間の入海を云う。内海と称する古き名也。」「半田山の下迄字海なりしことをしるべし。」「藤戸の迫門あせぬれど、尚水路開けり、源平の戦に佐々木馬にて渡せしに、其海面二十余丁あるを以て可知。……、上古其海広大なること大洋にひとし。」「東は邑久郡藤井村・土佐村・山下・福岡・八日市の川山中、上道郡久保・堀の・長利・下村迄、北は同郡赤甘・土田・国府市場、三野郡三野・半田山の下・津島、津高郡横井・栢谷・櫛津の山下迄、西は同郷辛川・一の宮、備中郡宇郡西山・大内田・山田・帯江、窪屋郡生坂・黒田・水江、又申の山下迄も屈曲、遙遠の洋々たる巨海なりしならん。」とあり、<sup>6)</sup>この海が吉備の穴海や阿知潟と呼ばれた浅海だったことを示している。

今日、岡山駅に立ったときその海の範囲は、東は約十五kmの瀬戸内市まで、北は約三kmの岡山市津島まで、南は約十二kmの岡山市(旧灘崎町)彦崎まで、西は約十四kmの倉敷市藤戸あたりまである広大なものであったということだ

資料①



- |        |        |        |          |        |        |         |        |        |        |         |        |        |        |
|--------|--------|--------|----------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|
| 1 大谷山  | 2 虎穴   | 3 船山   | 4 鶴山丸山   | 5 花崗岩  | 6 美原山  | 7 新法天神山 | 8 花崗岩山 | 9 小村山  | 10 酒樽山 | 11 下支那山 | 12 十輪山 | 13 甲山  | 14 虎尾山 |
| 15 藤山  | 16 西郷山 | 17 藤山  | 18 平野天神山 | 19 藤山  | 20 藤山  | 21 藤山   | 22 北の山 | 23 北の山 | 24 藤山  | 25 日吉山  | 26 藤山  | 27 占守山 | 28 石津山 |
| 29 石津山 | 30 石津山 | 31 藤山  | 32 藤山    | 33 藤山  | 34 藤山  | 35 藤山   | 36 藤山  | 37 藤山  | 38 藤山  | 39 藤山   | 40 藤山  | 41 藤山  | 42 藤山  |
| 43 藤山  | 44 藤山  | 45 藤山  | 46 藤山    | 47 藤山  | 48 藤山  | 49 藤山   | 50 藤山  | 51 藤山  | 52 藤山  | 53 藤山   | 54 藤山  | 55 藤山  | 56 藤山  |
| 57 藤山  | 58 藤山  | 59 藤山  | 60 藤山    | 61 藤山  | 62 藤山  | 63 藤山   | 64 藤山  | 65 藤山  | 66 藤山  | 67 藤山   | 68 藤山  | 69 藤山  | 70 藤山  |
| 71 藤山  | 72 藤山  | 73 藤山  | 74 藤山    | 75 藤山  | 76 藤山  | 77 藤山   | 78 藤山  | 79 藤山  | 80 藤山  | 81 藤山   | 82 藤山  | 83 藤山  | 84 藤山  |
| 85 藤山  | 86 藤山  | 87 藤山  | 88 藤山    | 89 藤山  | 90 藤山  | 91 藤山   | 92 藤山  | 93 藤山  | 94 藤山  | 95 藤山   | 96 藤山  | 97 藤山  | 98 藤山  |
| 99 藤山  | 100 藤山 | 101 藤山 | 102 藤山   | 103 藤山 | 104 藤山 | 105 藤山  | 106 藤山 | 107 藤山 | 108 藤山 | 109 藤山  | 110 藤山 | 111 藤山 | 112 藤山 |
| 113 藤山 | 114 藤山 | 115 藤山 | 116 藤山   | 117 藤山 | 118 藤山 | 119 藤山  | 120 藤山 | 121 藤山 | 122 藤山 | 123 藤山  | 124 藤山 | 125 藤山 | 126 藤山 |

日隆聖人の備中本隆寺への弘通  
— 地理的見地からの一考察 —

ある。資料①には、古墳時代前期の大型古墳群を示している<sup>(9)</sup>が、この推定海岸線からすると、吉井川・砂川・旭川・笹ヶ瀬川・足守川の河口と児島との間に、まさに大きな「穴海」があったことがわかる。

したがって、現在の平野が形成されたのは有史以後のことであり、沖積層の堆積が非常に旺盛であったことに驚かされるのである。この地方の俗言に児島湾は「毎朝半紙一枚の厚さで埋まる」とあり、そのことを伝えるものである。

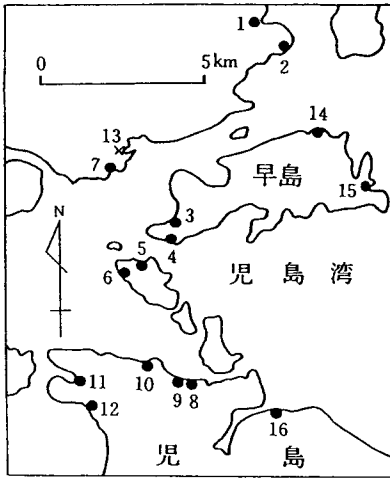
この岡山平野の基盤は花崗岩類であり、その深度は旭川河口に近い浜野付近でマイナス七一m、児島湾干拓地でマイナス三七〇m、足守川が合流して児島湾に注ぐ笹ヶ瀬川河口がもっとも深く、マイナス六〇〇〜七〇〇mである。花崗岩の上には第三紀層が厚さ五〇〇m前後堆積している。等重力線図などから考察すると、笹ヶ瀬川流域およびその河口が新生代地層の堆積が最も厚いことがわかる。<sup>(10)</sup> 一般的に海岸部は、三角州(デルタ)の成長によって陸化されていく。穴海の

場合、旭川が搬出したシルト（粘土と砂の中間物）・砂を海中に堆積して陸化した。これが岡山三角州で、その上を流れる旭川の各分流は、普通時には土砂を河道に堆積し天井川化するが、洪水時には溢水し、乱流し、広い氾濫原を形成したのである。

## ② 古代の貝塚

『東備郡村誌』に記されていることの真疑は、岡山平野の周辺で発掘された貝塚の分布によってもある程度確かめることができる。(資料②) 貝塚は原始時代（石器時代）の人々が、日常食用に供した貝類の殻を棄てたものが堆積し、普通は土に覆われて今日まで残存しているものをいうのであって、当時の人々の住居の近くにあるのが普通である。そしてこの貝塚は貝殻のみでなく、ごみ棄場でもあったから土器片なども一緒に見つかることもある。

## 資料②



(●印は貝塚)

1. 矢部、2. 西尾、3. 黒崎、4. 五日市、5. 羽島
6. 船倉、7. 西岡、8. 舟津原、9. 磯の森、10. 船元
11. 浦田、12. 福田、13. 菅生小学校裏(以上倉敷市)
14. 大内田、15. 妹尾大村池下(以上岡山市)
16. 彦崎(瀬崎町)

## 早島付近の縄文貝塚

### 『早島の歴史』より

本隆寺のある新庄より南に二〜六kmの周辺地域には数多くの貝塚が見られる。岡山市妹尾大村池下と岡山市大内田、倉敷市黒崎と五日市が知られている。それらの貝塚の主な貝類は、ハイガイとハマグリである。さらに、倉敷市羽島、船倉、西岡、庄地区の西尾と矢部、旧灘崎町彦崎などにも貝塚がある。これら内海の沿岸は海の幸に恵ま

れ、背後の山丘は木の実の採集とシカ・イノシシなどの動物を狩猟するのに適した場所であった。縄文人の生活にとつて快適な条件を生み出していたのである。

新庄より六km南の早島から平地を少し西へ行くと倉敷市街地の東南に位置する向山丘陵に至る。この丘陵の北の端で山裾が平地へ移る地点に縄文時代の羽島貝塚がある。この貝塚では貝殻が含まれている土層の下に砂の層がみられる。その砂は、海岸の少し入り込んだところへ波浪や潮流が造成した砂州を形成していたものである。八〇〇〇年あまり前に播磨灘の西端にまで達していた海水が、さらに上昇を続けて児島湾へ侵入し向山の山裾まで達して、潮流や波浪が海辺の山麓を浸食した砂を運ぶことで海辺に砂州を造つたものと考えられる。出来上がった砂州上に、やがて人が住んでいたことが発掘調査でわかっている。羽島貝塚下層の砂の中からは、今から六〇〇〇年ばかり前の縄文時代前期初めの土器片や石器が出土している。

### ③ 中世の貝塚

中世の貝塚は一般的にみると、縄文時代や弥生時代の貝塚があつた地点より沖合であつた場所で発見される。早島町内の丘陵上で貝塚と判る場所としては、無津・千光寺・城山などが知られており、その他の地域にも多く存在したと考えられる。早島は、倉敷地域の縄文貝塚所在地であつた黒崎・五日市・羽島などからすると東の沖合であり、岡山市の大内田・妹尾大村池下の縄文貝塚や関戸・高尾の弥生貝塚からは南西沖合に位置している。中世ともなると、沖合の海に面していた早島付近でも干潟が設立するほどに、高梁川の沖積作用が進んでいたのである。それは、江戸時代に干拓平地が成立する前段階の時代だつたといえる。

貝塚の貝は、ハイガイが圧倒的に多い。放射状の肋条が二〇本弱見られる二枚貝で、この地方では縄文時代の貝塚

以来、貝塚の貝の主要な種類である。明治時代になって児島湾の干潟でモガイ（サルボウ）の養殖が始まるまで、ハイガイは、干潟の貝の中で主流であり続けたようである。モガイの身はハイガイよりも軟らかく、泥海での養殖に適している。

こうして、海面の陸地化が進む中で現在のように児島は陸続きとなり、内海であったところもやがて内陸の地になっていったのである。足守川の中・下流域は、この川のもたらす土砂によって沖積平野として陸地になっていったのである。

## 第二項 瀬戸内の航路

### ①鎌倉期以前の航路

前項で見えてきたように、児島は完全な島として存在している時代があった。その頃、瀬戸内海を東西に航海する船の航路は、児島の北側を通過していたことが分かっている。しかし、前述のように、高梁川などの沖積作用で海深が浅くなり、本州と児島の間の海域が狭まるにつれて、児島の北を航行する船舶は減少していったのではないかと考えられる。

では、いつごろまで児島の北側のルート（北航路）が使用されていたのか、文献史料が少なく、史料中の地名表示も明確でない古代から中世の時代においては、はっきりとしたことはいえないが、数少ない史料から推測してみよう。

まず、蓮禪という僧侶が平安期に著した『本朝無題詩』の中には、瀬戸内海を船で遊覧して紀行先各地で詠んだ漢詩が収録されている。<sup>(12)</sup>これには、門司・長門・周防・安芸赤崎から道口・藤戸・甲浦・虫上・室の順序で漢詩が掲載されており、蓮禪は、九州から瀬戸内沿岸を東向きに移動したと考えられる。道口の津は現在の玉島道口付近と考

えられ、港があつたようである。玉島付近も弥高山山塊とその南の乙島・柏島・奇島の上に、海路として利用可能な水域が見える。その後、蓮禪は藤戸浦を過ぎていようであるから、航行ルートは北航路を通つたことが想像できる。

平安末期の治承四年（一一八〇）、高倉上皇が安芸厳島神社に参詣した復路では、「備前国内海」を航行したことが記されているので、この時期にも、北航路が使用可能であつたと考えられる。ただし、『平家物語』『源平盛衰記』などに記された、いわゆる「藤戸合戦」における先陣争いの話を信用するならば、藤戸の沖はすでにかんりの浅瀬の部分が広がっており、大船団や大型船舶の通行が困難になつていたのであろうと想像される。鎌倉末期の正安二年（一三〇〇）に描かれたとされる「備前国上道郡荒野庄領地図」（大宮家文書）にも、「フジトノ□□<sup>セトカ</sup>」という記載が見えており、藤戸が海峡の様相を呈していた事が知られる。<sup>(13)</sup>

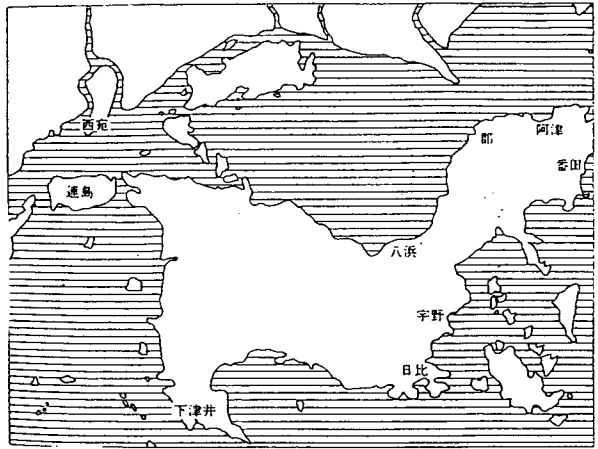
以上のように、奈良朝から平安朝にかけては、なるべく安全な陸地沿いの北航路が採られていたようである。

## ② 南北朝・室町・戦国期の航路

では一体、南北朝期以降、児島付近の船舶航行ルートはどうなるであろうか。応永二十七年（一四二〇）には、朝鮮からの使者宗希環<sup>シノキヅノ</sup>が著した『老松堂日本行録』によると、対馬・壹岐を経て、博多に半年ほど滞在した後、三月下旬ごろから瀬戸内海航路を東上し、四月初めに玉野市日比を通過して入京、將軍足利義持に謁見した後、再び瀬戸内海を西へ向かつて朝鮮への帰途についている。その途中の七月七日、兵庫県室津を出発し、下津井に停泊したようである。<sup>(14)</sup> 戦国期以降になると、瀬戸内海航路を東西に航行中、潮待ちで下津井に入港したり、沖で停泊した例や日比に停泊・停船した例が多く見られる。

文安二年（一四四五）の『兵庫北関入船納帳』には、児島の南北共に船籍地が分布している。（資料③）このほ

### 資料③



兵庫北関入船納帳に見える倉敷周辺の船着地

#### 『倉敷市史 2 古代中世』より

一年間のうち、下津井船は三十三隻が兵庫北関に入港している。このことから、下津井が瀬戸内海航路上で重要な役割を与えられていた港の一つとして機能していたと考えられるのである。しかし同年、北部八浜の二百石積の船六隻が入港しているのが見え、<sup>(15)</sup> 下津井には及ばないが依然として北航路も航路としての役目を果たしていたことがわかる。

これらのことから、初め児島の北を航行していた船は、倉敷付近の沖積に伴って船の航行がしにくくなった北側を避けて児島の南側を通るようになっていったこと、その時期については明確ではないがおよそ鎌倉末期から南北朝期にかけてではないかと推測されること、航路の変化に伴って児島北岸の藤戸浦か

ら南岸の下津井へ寄港地が変わっていったことなどが分かる。

### ③ 足守川の遡行

この北航路は、河川の沖積作用によってやがて陸続きとなり、内海であった所は現在の様に、児島湾となっていくのである。その北航路と備中本隆寺を結ぶのは、眼前を流れる足守川であり、新庄の地より下流へ約10kmのところ

笹ヶ瀬川に注流し、さらに八km流れて児島湾に注ぎ込んでいる。この下流域は、天井川となっており、これらの河川の沖積作用がいかに旺盛かを物語っている。

新庄より約四km下流にある岡山市納所の古老の話では、かつては納所に米蔵があつて年貢米を納めており、その米を積み出すため児島湾から納所まで舟が入ってきていたということである。納所の地名の由来の言い伝えであるが、古くは納所付近まで遡行可能であつた時代が長く続いたのかもしれない。

また、正保四年（一六四七）の『備前備中灘道舟路記』（岡山大学附属図書館「池田家文庫」所蔵）によると、<sup>(16)</sup>さらに二km程下流に行つた庭瀬までは、児島湾から足守川を通り二百石積の舟の入港していたことが記されている。その後、足守川の埋没が進み、大型船の入港ができなくなり、庭瀬の舟入りには小型船の入港しかできなくなったようである。

これらのことから、これ以前の南北朝期頃には、足守川ではしばしば小舟のような船の往来が見られたのではないだろうか。では、その足守川の状況について次の項でもう少し見ていくことにする。

### 第三項、湛井十二か郷用水

#### ① 湛井十二か郷用水

吉備高原を流れた高梁川が総社平野に流れ出る、ちょうどその出口に当たる総社市井尻野字湛井<sup>た</sup>に設けられている井堰が高梁川最大の規模と伝統をもつ湛井堰である。現在の湛井堰は岡山県の高梁川用水改良計画に基づいて昭和四十年にコンクリート固定堰に改修され、改修前までの井堰は毎年春彼岸頃に木枠を沈めたうえ、川石をつめて高梁川を堰き止め、用水が不要になる秋彼岸頃に撤去するのを習わしとしていた。

よって、高梁川を上下して物資の輸送にあたっては高瀬舟や筏も、春彼岸後は湛井堰が築造されると、通行を差し止められ、その期間は湛井で荷物を積み替えて運ばなければならなかった。ただ水の豊富な年には底枠だけを入れて済ますこともあり、その場合には出水時に底枠の上を越して通行することも可能で、また舟通しを開いておくこともあったから、実際に高瀬舟や筏の通行が差し止められたのは早魃の年に限られていた。しかし、十二か郷は用水期間中には水量の多少にかかわらず通行を差し止める権利を持っており、その都合によつては早魃の時以外にも通行を差し止め、船頭・船主等と紛争を引き起こすこともしばしばであったようである。

湛井堰がこのように強力な優先的取水権や高瀬舟の通行差止権を持っていた理由として考えられるのは、①湛井堰の創始が極めて古い、②高梁川の氾濫原を開発したため、③下流の酒津等の井堰が創設された頃には、すでに十二か郷による湛井堰からの取水権が確立していたこと、等によるものではないかと思われる。正徳二年（一七一一）に上流の高瀬舟の船主・船頭らと湛井堰通行差し止めをめぐる紛争が起こった時に、十二か郷側が湛井堰の創始は六百年前であるが、高瀬舟の就航は百六十年にしかならぬと、その歴史の古さを理由にあげているのである。<sup>(17)</sup>

## ② 高梁川と足守川

現在、湛井堰から総社平野を東流する十二か郷用水の幹線水路は、総社市井尻野字湛井から阿部・西山を経て、元の備中国衝と考えられる金井戸の「御所の内」の東側を流れ総社市上林字落合に至る。この上林字落合から岡山市新庄上字岩崎の亀岩までの幹線水路は前川と呼ばれている。

『備中誌』の井尻野村の項を見ると、

延喜前後、真壁辺新墾の地なりし頃ハ、今の松山川南と東に流れて、甚東ハ湛井より真壁・井手村・清水へ流れ

し也。何れの頃にや、東側を堰き留めて、南川へ流しかけたり。

とあって、<sup>(18)</sup>古く高梁川が井尻野から東へ分流（高梁川東分流）していたことを記している。

総社市金井戸の「御所の内」にあった備中国衙は南を東分流の本流、北から東にかけて支流が流れていたことから、この東分流を利用して租等の税を運ぶ舟運の便が考慮されて、この地にあつたのではないかと想像される。

岩崎の亀岩から下流では、足守川が十二か郷用水の幹線水路として利用されている。足守川は倉敷市矢部・日畑、岡山市撫川を経て児島湾に注流しているが、高梁川東分流が退化するまでの足守川は東分流に注流する一支流であった。また当時、その支流のうちの一つが東に向けて流れ、高松の町を通っていたようである。これが現在、加茂用水として利用されているもので、その両岸一帯は水田となっている。この水路の北側に沿って東西に細長く続く高松の町並は周辺の水田地帯よりやや高くなっている。そこは元の高梁川東分流の自然堤防跡と思われる、羽柴秀吉の水攻めで有名な高松城付近の水田地帯は土地が低く冠水しやすい場所であつて、その後背湿地にあたると考えられる。

この高梁川東分流の跡背湿地に築かれていた高松城は守るに易く攻めるに難しい堅城であり、天正十年（一五八二）中国征討に向かつた秀吉を悩ませ、ついに天下に名高い水攻めとなつたのである。自然堤防跡と足守川の位置を考えれば、水攻めは最も効果的な高松城攻略法であつたといえる。秀吉はわずか十数日で延長3kmに及ぶ長大な堤防を築かせ、足守川の水を引いて水攻めを行なつたと伝えられるが、その堤防は高梁川東分流の残していた自然堤防を巧みに利用して短時日で完成し、しかも大きな効果を得たのである。

### ③ 湛井堰の起源

では、高梁川の湛井堰が整備されたのはいつ頃のことなのであろうか。

平安中期の延喜五年（九〇五）に編纂された『延喜式』の「卷廿六主税上」をみると、備中国の項には「正税公廩各卅万束、国分寺料三万束、蓮厳寺料一千束、文殊会料二千束、修造堰溝料一万七千束、駅家料一万束（以下略）」とあつて、堰と溝の修造料として国費から一万七千束が支出されている。

また、『延喜式』よりおよそ一世紀前の平安初期に編纂された『弘仁式』の「卷廿五主税上」のなかにも、「備中国、正税公廩各卅万束、国分寺料三万束、修造堰溝料一万束」と記されている。<sup>(19)</sup>

『延喜式』によつて他の国の場合をみると、周辺の備前国・美作国をはじめとして、すべて「修理池溝料」、つまり池と溝の修理料が記載されているだけで、堰の修造料は全くみられない。したがつて、国費から堰の修造料をあてがわれていたのは備中国だけであつたわけである。毎年多額の国費をもつて修造の行われていた井堰ということになると、相当の規模をもつた井堰であつたと思われる。備中国においてそのような大きな井堰ということになると、高梁川筋に設けられていた井堰と考えられ、高梁川の洪水によつて押し流されることもあつたであろうし、また川舟や筏の就航のため、取り払ふ必要もあつたであろうから、毎年の修造が必要であつたことは想像に難くない。また、『弘仁式』に記載された備中国の修造堰溝料が一世紀後の『延喜式』では七千束も増加しているのは、井堰の規模の拡大とともに水路の整備やその維持費用の増額を物語っていると考えられる。この『弘仁式』・『延喜式』に見える井堰は、もともと現在の総社市井尻野の俗に「六本柳」と呼ばれるところにあつたものである。十二か郷村内では、その後、平安末期の寿永元年（一一八二）に妹尾太郎兼康がもつた井堰を湛井に場所替えし、整備、築造したという「兼康築造説」が伝えられている。兼康は備中妹尾郷（現在の岡山市妹尾付近）に所領を持ち、平氏の有力な家人として、『平家物語』にその武勇を称えられた人物であるが、彼が果たしてその伝承のとおり湛井堰を築造したかどうかについては、残念ながら全く確証がない。しかし、十二か郷では湛井堰が妹尾太郎兼康によつて平安末期の寿永年中に築造さ

れたと伝えており、それは単なる伝承というよりも確かな事実として信じられていたのである。

いずれにしても、このように平安時代に整備が進められていた可能性が強いのは井尻野から岩崎あたりまでであり、岩崎から下流の幹線水路や主要分水路が整備されたのはかなり後のことであつたと思われる。岩崎以南の現在の足守川は、もともと高梁川東分流の一支流であつたものであろうが、足守川が岩崎から真つすぐにその支流を流れるようになること、東分流は退化し前川も足守川へ合流することになった。その結果足守川が幹線水路として利用されることになつたのであろう。

下流域については、天正十三年（一五八五）岡山城主宇喜多秀家が倉敷付近の新田開発を行つたときには、倉敷市日畑字西山の下流四か郷分水所から取水する計画を立てている。よつて、少なくともその頃までには下流四か郷分水所もほぼ後世の形を整えていたものとみてよい。こうしたことから、室町末期にはほぼ現在と大差のないほどに用水路の整備が進められていたと考えられる。以上のように、井尻野から岩崎の亀岩までの幹線水路や主要分水路の整備が進められたのは平安時代に遡り、これに対して亀岩から下流は南北朝から室町末期にかけて整備されていったのではないかと思われるのである。後世、湛井から亀岩までの地域を上郷といい、それより下流を下郷と称しているのも、このためかもしれない。

#### ④岩崎の亀岩

岡山市新庄上字岩崎の亀岩は現在、十二か郷用水の下四か郷への岩崎分水所となつており、東へ加茂用水（岩崎用水）、西へ新庄用水を分岐している。岩崎分水所は昭和二十五年にそれまでの土俵堰に変わつてコンクリート堰に改修されているが、安永二年（一七七三）に描かれた絵図によると、<sup>(3)</sup> 亀岩を利用して築かれていたものである。（資料④）



の近辺を山陽道と松山往来という二本の街道が通るもののいずれも1km程度離れており、街道沿いというには遠すぎるものである。とすれば、何か目標となるものがあつたのではと考えれば、現在は庚申山と呼んでいる寺山の関連である。庚申山の伽藍はいずれの街道からもよく見える岩崎山の山頂にあり、日隆聖人はそこを指指して来られたのではないだろうか。いずれかの街道に歩を進められていた聖人は、目に付いたその寺山を指指して来られたのではないかと想像されるものである。この第二章の冒頭で取り上げた、本能寺第五十七世の日唱上人が一七八〇年頃に著された『両山歴譜』には

備中州有「帝釈山」依「師教」僧俗授戒立「一字」号「本隆寺」差「日学上人」為「第二祖」

とあり、備中本隆寺の項で帝釈山つまり庚申山の名を記されている。江戸時代後期の日唱上人の頃は、庚申信仰が隆盛を極めた頃であり、このような表現がなされたのではなからうか。しかし、本隆寺蔵の「縁起」などでは、第七世日正上人の頃が庚申山の初見である。

次に、第三節で述べた海路について考察してみる。まず、日隆聖人の西国布教においてはやはり舟を用いたと考えるのが妥当である。日隆聖人が備中に布教された当時、児島湾は沖積の中途であり、まだ児島は島として独立していた。しかし、藤戸の門はかろうじて通れるような状況で、大型船の船団などは南航路を通るようになったようであるが、そうでない場合は陸路に近い完全な北航路を取っていた。

時代が少し下がるが、注目できる記事がある。それは、備前野々口の旧家、大村家に伝蔵される『道中日記』である。<sup>21)</sup>これは、法華門徒である大村氏が野々口を出発して、比企・池上・身延の三山参詣に行く様子を書いたものである。ある年の二月二十六日が出発日である。そして、「野々口村より今保二付」と、初日の旅程を筆者は残している。野々口は松田氏の本拠地金川から南に約1kmのところであり、彼らはここから最初の日に今保に着いた。今保とは足守川

の河口、当時は児島湾の小港である。彼らはここから、堺まで船路を選んだ。翌二月二十七日、今保から乗船、児島湾を横切つて海上八里、備前牛窓港に着く。著者は、この日記が天文十年（一五四一）から弘治元年（一五五五）の間に書かれたものではないかとしている。

このことを考慮に入れて、日隆聖人が備中布教された頃は足守川はまだ現在のように笹ヶ瀬川に注流せず、そのまま児島湾に注いでいたのではなからうか。現在は河口から新庄までは十八km程あるが、それが今保までだとすると八km程になり、足守川を遡上されるのに現在よりは無理がないように思われる。河口付近には庭瀬の内港が発達しており、他にも小港があつたであろうが、そのままその足守川を遡上されたのは、他に何か大きな目的があつたからであろうと考えられる。足守川、さらには高梁川の上流に目を向けると、野山妙本寺（旧賀陽町）がある。ここは日像聖人の命を受けた大覚大僧正が創立した寺といわれており、大覚大僧正の足跡を辿られた日隆聖人が、ここを備中における最終目的地に選ばれることは、十分に考えられることである。

ところが、その中で日隆聖人が新庄の地に足を止められたのはどうしてだろうか。第三節第三項で述べたように、足守川は古来、高梁川の東分流に注流する一支流であつた。しかし、その東分流の水量が少なくなつて廢川になり、それが用水路として利用されるようになったのである。これが、総社平野を貫流し、新庄の岩崎までを灌漑する湛井十二か郷用水である。前述のように、湛井堰から岩崎亀岩までを上郷、それより下流を下郷といい、岩崎亀岩までの上郷は、平安時代には、整備が進められていたようである。よつて、舟を通さないようになっていたものかもしれない。安永二年（一七七三）に描かれた絵図によると、岩崎の分水所は亀岩を利用して築かれていたものである。室町四つの大岩からなり、その一番東側の岩から高塚の流作場の北端にかけて土俵十六俵で堰いていたものである。室町の時代もこの仕組みにさほどの変わりがないと考えると、足守川を遡上されていた日隆聖人の舟がここ、新庄岩崎で

足止めされたのも理解できるわけである。また、特に岩崎の辺りは足守川、前川、血吸川などが合流するところであり、舟にとつては特に難所だったことも付け加える。

この考察からすると、日隆聖人が岩崎で止まられたのは偶然であったと思えるかもしれないが、いずれにしてもそれによつて我々が法華の妙味に触れさせていただくことができたのは、実に有り難いことである、と思うのである。

おわりに

この度は、私の拙稿を掲載していただくことになり、恐れ多くも大変光栄に感じております。この研究は、大覚大僧正に続いて西国を布教された日隆聖人の足跡をたどつてみたいと思ひ、取り組んだものであります。今後も、さらに研究を続けて参りたいと思ひます。

文末となりましたが、興隆学林在学中に御指導いただきました諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 小西徹龍「日隆聖人の瀬戸内海沿岸布教についての一試論」(『桂林学叢』一四 平成元年) 二〇頁
- (2) 小西徹龍「日隆聖人の瀬戸内海沿岸布教についての一試論」 一一〇頁
- (3) 『岡山県の地名』(平凡社発行 昭和六十三年) 三六頁
- (4) 『総社市史 通史編』(総社市発行 平成十年) 四二二頁

- (5) 『総社市史 通史編』 四一三頁
- (6) 『総社市史 通史編』 六三五頁
- (7) 門脇禎二『吉備の古代史』（日本放送出版協会発行 平成四年）一八一頁
- (8) 竹久順一『岡山県の地理』（福武書店発行 昭和五十三年）一二七頁
- (9) 門脇禎二『吉備の古代史』 五三頁
- (10) 竹久順一『岡山県の地理』 一二七頁
- (11) 『早島の歴史』（早島町発行 平成九年）一二頁
- (12) 『倉敷市史 2 古代中世』（倉敷市発行 平成八年）五三〇頁
- (13) 『倉敷市史 2 古代中世』 五三一頁
- (14) 『倉敷市史 2 古代中世』 五三三頁
- (15) 林屋辰三郎『兵庫北関入船納帳』（中央公論美術出版発行 昭和五十六年）二六九頁
- (16) 藤井駿、加原耕作『備中漣井十二箇郷用水史』（漣井十二箇郷組合発行 昭和五十一年）二六六頁
- (17) 藤井駿、加原耕作『備中漣井十二箇郷用水史』 七三頁
- (18) 藤井駿、加原耕作『備中漣井十二箇郷用水史』 一九頁
- (19) 藤井駿、加原耕作『備中漣井十二箇郷用水史』 二九頁
- (20) 藤井駿、加原耕作『備中漣井十二箇郷用水史』 九六頁
- (21) 藤井学『法華文化の展開』（法蔵館発行 平成十四年）三〇五頁